

私が社会に出た頃は、若者が情熱をもって人間らしくひたむきに生きようとすれば、たちまち官憲に追われ、世間からは白眼視されるという馬鹿げた時代であった。

さいわい私は青壮年期、体だけは強健であった。そのため再々軍隊にとられはしたが何事もなくすんだ。とはいえ、その間私は不正を憎む反逆の志をひそかにあたためつつけた。

あの八月十五日の敗戦により、やっと精神の自由を得たと私の心は躍ったが、今度は肉体の方が戦場から持ち帰った病菌にさいなまれ、思うままの活動ができなかった。振り返ってみると、やり残したことばかりが脳裡に浮かぶ。

今、私の住んでいる神奈川県厚木市は、行政目標に「親孝行宣言都市」などという時代錯誤的なものを掲げているが、現在の私は、これに反駁する気力だけはあるものの、如何せん、身体の自由が利かず、病床でひとり歯噛みしているような有様である。

このような不如意の状態で、七十回目の誕生日を私は迎えた。自己の経歴を省ると、誇り得る事はあまりに乏しいが、ご情誼厚かった方々への感謝のしるしとして、このささやかな記録を残す。

なおこの本の出版にあたり、「後記」を寄せて下さった向井孝君をはじめ、身体不自由な私の意向を

汲んで企画の段階から協力を惜しまなかった飯塚の吉野繁則君、実際の本づくりの過程でお世話になった神戸の高島洋、前田幸長、平山忠敬・房子、戸田広介、谷川渉、中山敬一らの諸君に感謝したい。妻の力添えと共に、これらの諸君の協力がなければ、このささかな本も生まれなかったであろう。

一九七六年一月一〇日

### 運動史のなかの一九五二年

——解説にかえて——

向 井 孝

戦後のアナキズム運動を語ろうとするならば、一九四六年五月に結成され、六九年十二月に宣言を發して解散した日本アナキスト連盟の歩みを、除外することはできないだろう。

略称して「アナ連」と呼ばれるその歴史を、現在の立場からどのように評価するにせよ、またその実際について全く智識をもたぬとしても、アナ連が存在した二四年間という、かつて過去日本のアナキスト運動になかった永い年月が、何のこともなくただ安易に維持されてきたと考えるならば、それは運動者として、現実的視点での想像力を欠いているといわねばならない。

事実、ふりかえてみると、いまここで名をあげて数えることができるほど少数の、ひとにぎりというにふさわしい、とくに、東京・阪神・九州地協の、それぞれ五人〜十人たらずの仲間たちが、ときにはすべてをなげうっての、ひたすらな努力に支えられてのものなのであった。

その中で別して、東京とは対照的に九州（筑豊）の同志たちが一貫して果たしてきた役割は、あまり記録には残っていない裏方的なものであったがゆえに、おそらく年月の経過とともに、いつしか忘れ去

られていくことになるだろう。

しかしアナ連活動の全期間を通じて、もし九州地協という名による数人の人たちの献身がなければ、かりに連盟が存続したとしても、ほとんど名目だけのものとなっていたにちがいない。

なぜなら、運動の沈滞・衰退期における最低条件としての組織活動と、それにもましてシンパ大衆との結合を意味する「機関紙発行」の基礎は、四七年以降、ほとんど九州地協の力に負っていたからである。

ざっくりばらんに云えば、『平民新聞』から『クロハタ』『自由連合』に至るまで、機関紙の発行を可能とする印刷費の50%~90%は、一貫して九州地協がつねに拠出したものであった。しかも、さらに編集発行を受け持つことからさえアナ連が失ったとき、みずから発行を受け持つ、一時期をつないだのである。

\*

いまアナ連発行の機関新聞を年代的に列記すると次のようになる。

46年6月~49年8月 週刊『平民新聞』（東京事務局・近藤）1~124号  
49年9月~50年4月 旬刊『平民新聞』（広島・栗原唯一）通巻130~138号  
50年5月~50年12月 旬刊『平民新聞』（岡山・高畑信一）通巻139~151号  
51年3月~51年5月 月刊『平民新聞』（大阪編集発行・印刷岡山・高畑）通巻152~154号  
51年7月~52年3月 月刊『自由共産新聞』（東京事務局・山口）1~8号

51年9月~51年12月 半月刊『自由共産新聞』（飯塚・杉藤二郎）1~9号  
51年12月~53年5月 旬刊『平民新聞』（飯塚・杉藤二郎）1~50号

（このあとの空白は機関雑誌『アナキズム』24号まで刊行）

56年3月~62年8月 月刊『クロハタ』（福岡・副島辰巳）51号より東京・大沢）1~78号  
62年9月~70年1月 『クロハタ』改題月刊『自由連合』（東京事務局・大沢）79~147号

このように書きつらねると、割合スムーズに、ひとつの発行態勢がくずれるとすぐバトンタッチされて、まがりなりにも機関紙がつくりつづけられてきたように、誰もが思うだろう。

だが東京より発行されたものをのぞいて、その他の広島・岡山・大阪・飯塚・福岡で発行されたすべては、組織として発行能力を失ってどうしようもなくなった時点で、ほとんど個人的な決意と大きな負担によって刊行されたものであった。そして組織的には、その後の大会などで追認されるという形をとったものに外ならない。たとえば岡山の高畑信一はこの発行のために、ほとんど私財を投入して、家業のミシン数十台を売払うという風に、そのかけにははかりしれぬ苦労がこめられていたのである。

\*

五一年九月、『自由共産新聞』九州版を、杉藤が出すことになったのは、そのような個人的な発意の、運動者としての責任をみずから課すことから、はじまったものであった。

そのすこしまえ、六月に開かれたアナ連大会では、旬刊『自由共産新聞』の発行がきまり、早速七月

第一号が東京から刊行された。

しかし解散して半年、ようやく再建直後の東京地協によって構成した事務局は、その努力にもかかわらず、早くも三号を出して遅刊、息切れの様子を呈した。

それでなくとも週刊一旬刊一半月刊一月刊と次第に間遠く、ニュースの即時性や情報伝達の早急性を失ってきた機関紙にとって、遅刊は致命的な機能低下であった。

このような状況の下で杉藤の九州版自共は、毎月五日東京発行の間隙を埋める一五・二五日、月二回刊として筑豊地方の記事を中心に、はじめられたのである。

そのころ飯塚公民館で謄写版印刷の講習会があった。杉藤はその西の内式という謄写技術を一カ月みっちり受けた。彼の四十五才のときである。

九州版自共はタブロイド二頁、その第一号はその講師に製版を頼んだが、二号以降はすべて杉藤自身の手でつくられた。そのうえ、間もなくそれは四頁となった。タブ倍版のものを刷るためには、まずその大きさの原紙が必要である。土佐の産地に別注した二ミリ方眼の特別原紙は一枚二〇円もした。次は謄写版。市販のものでは小さすぎるので、パチンコ台を利用してくふうのあげく手製でつくった。ワックには原紙を直接コテではりつける。ローラーは印刷屋から入手。インクはオフセット用を石油で溶いて使う。ヤスリはAC・BC・アート用など五枚、全部あわせて当時の金で二万円あまりもかかった。

こうしてはじめられた新聞発行は、いざ定期刊行を正確に励行するとなると、経験者でも想像に絶する、実は大へんなことであった。まず、とにかく原稿づくりである。つぎに割付けをしてガリを数日ばかりできり終る。紙を揃え、インクをねり、大きなローラーを押し一枚一枚刷り上げる。原紙のはり方やローラーの動かし方が下手で、万一破けるとまた一からやり直さねばならない。そして封筒かき。

切手代を工面してようやく発送。やれやれと一息つく間もなしに、また次の号にとりかかる——という生活も何もかもすてて、ただ新聞にかかりきる日々がはじまったのである。

しかも『平民新聞』と改題して、さらに旬刊で出すことになったのは、その年の十一月、東京に一年余在住していた九州地協の中心者・副島辰巳が帰福して、用紙代などを応援してくれることになったからだ。それとまた一方で、まもなく東京の『自由共産新聞』が、八号でとうとう休刊したあと、その代行として、全国紙の役割りを負うことになるという状況が出てきたこともあった。

こうして月三回ガリ刷りタブロイド四頁発行というまさに超人的な杉藤の活動によって、アナ連はその一時期、機関紙の断絶という最悪の危機を、通りぬけることが出来たのである。

\*

それにもまして杉藤の、このガリ版印刷による新聞発行という実例は、たとえ一人でも、どんな地域でもやろうとすればやれるという、新しい勇気を東京・大阪はじめ各地の同志に示すものだった。それはただちに五二年四月のアナ連大会で論議され、それまでに杉藤が発行した新聞号数を引継いで、五月一八号よりガリ印刷で、旬刊・中央版（東京事務局編集・印刷）として刊行がはじまった。また関西地協からも、関西版（月一回、のち国際版となる）があらわれることになった。

また、それから約半年後の十月、中央版がふたたび力尽きて三二号で休刊すると、すかさず杉藤はそれを引継いで、十一月からそのあとの号を発行しはじめたのである。

しかも中央版が出ていた半年のあいだ、杉藤自身は、そのまま手を休めていたのではなかった。その

空白期間中、実に五冊もの次のようなパンフを、つくり出し発行したのである。

『サンジカリズム』 サンソム著 大沢正道訳

『自由への道』 ブランド著 副島辰巳訳

『反戦詩集』 向井孝編

『行動美論』 石川三四郎著

『スターリンロシアの労働者』 ルイズ・ベルネリ著 大沢正道訳

とくに最後の『スターリンロシアの労働者』は、パンフというより本というべき八十余頁の量で、スターリン批判の先駆をなした実証的内容の、本邦初訳、ベルネリの名著だ。暑い真夏のさなかを、杉藤はこのガリ切りだけに、まる半カ月かかりきったという。そしてこのような、休む間もない日々の活動が続いていたからこそ、中央版が休止したとたん、まるで待ち受けたように早速の、連続した発行が杉藤には出来たのである。

当時、連盟員の数は全国で二十名前後にすぎず、戦後の全期間を通じて連盟組織がもつとも沈滞して組織的にも状況的にもみんなが力を失っていた最悪のときであった。そのような一時期、はからずも杉藤が飯塚から発行したガリ版『平民新聞』の役割は、今にして思えば、まさに消えようとする連盟の灯を受けついで、その運動を維持し、明日へとつなぐ大きな役割を果たすものにはかならなかった。

そしてまたぼくらは、しばしば襲ってくる無力感と孤立と闘いながら、その杉藤の想像にあまる努力の結果に、どれだけ大きくはげまされたことか。そのころほとんど無自覚で想像することもできなかつた。

たぼくが、今になってようやく、それがどのような意味をもつものであったか、はかりしることが出来る。

やや色あせて黄ばんでしまった往年の、ガリ刷り『平民新聞』をたまたま手にしたとき、その一枚をつくるために、机に向かい、インクを溶き、ローラーを動かしてひたすらはげむ杉藤の姿が、はっきりと見えてくる。

それはまた、二十余年たったいまも、杉藤の面影とダブって、彼の生涯をひとすじ明るくかがやかせているのである。

#### (付記)

本書の編集にあたって、後記を、このことであつた。もちろん到底そのような柄ではない。それを承知の上で、戦後運動史の一資料にもというつもりでこれを書いた。そのゆえの敬称を略するなどの非礼をおゆるし願いたい。

それから、肝腎のことを書き洩らした。

杉藤さんの活動の裏にあつて、その夫人しのだもりのさんが、一家の生活を支えながら十日毎の新聞発行の実務にも大きく寄与したことを見のがせない。それだけではなく『平民新聞』九州版八号から、杉けい子の筆名で十八回連載された小説『箱の中』、つづいて『塵埃の記録』など、そのするどく細密な現実描写を特徴とする本格的な作品は、何よりもこの九州版を特色つけて、識者の評判を呼んだものだった。謙虚さゆえにアナキズムをみずから名のらず語り出でない、この蔭の女性同志の存在を忘れることはできないだろう。

最後にこの本づくりに協力した多くの人たちとともに、杉藤さんの本書の刊行をよろこびたい。

杉藤 二郎 (すぎとう・じろう)  
一九〇五年名古屋市に生まれる。  
一九二五年早稲田大学英文科を卒業。朝日新聞記者となる。  
一九四五年十一月敗戦を機に記者を辞め、九州筑豊に赴き炭坑での労働生活に入る。四六年春より労働組合長を二期つとめ、以後五年間にわたって労働組合運動に専念する。  
一九四七年アナキスト連盟九州地方協議会の結成に参加。九州地方（特に筑豊）におけるアナキズム運動を精力的に推進する。  
一九五〇年病氣のため炭坑を辞職。回復の後は「自由共産新聞」「平民新聞」をほとんど独力で刊行。かたわら公民館長・監書被書者連合会事務局長・町会議員等をつとめる。  
一九五四年東京へ移住。六五年現住所（神奈川県厚木市緑ヶ丘4-2-418）へ移る。病臥療養中。

筑豊の黒旗——思い出の断片——

一九七六年二月二十五日 印刷  
一九七六年三月一日 発行

著者 杉藤 二郎

神奈川県厚木市緑ヶ丘4-2-413

発行所 神戸共同文庫

神戸市葺合区上筒井通6-2-13

電話 神戸242-4573

印刷 摩耶プリント―田中印刷出版

製本 須川製本所

〔非売品〕